
インフィニット・ストラトス ~ 赤竜と白の騎士 ~ reddragonawhiteaknight ~

kuxu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS（インフィニット・ストラトス）赤竜と白の騎士（reddragonawhitelight）

【Nコード】

N1028X

【作者名】

kuxu

【あらすじ】

オリジナル主人公、相田翔。原作主人公、織斑一夏。

2人の主人公が出会うとき、新たな物語が始まる。

2人の視点で動き出す物語。

完全オリジナルストーリーとなっています。

不定期更新ですが応援お願いいたします。

1 - 1 プロローグ（前書き）

始めまして。

k u x uと申します。

今回初の二次創作作品となります。

暖かく見守ってくれるとうれしいです。

1-1 プロローグ

これは、中学のころの記憶なのか。

確か、僕はIS学園に来ていたはずなのですが。

僕は何も知らない道で手間取っていた。

この時、僕は先生の手違いのせいでIS学園に来させられていた。
僕もISは女性しか使えないことは知っている。

だが、その一緒にきた女子たちが自分勝手な行動のせいで僕一人だけ取り残されてしまった。

そのとき、僕はある開いているドアを見つけてあけた。
そこには確かにISがあった。

僕はその時何がしたかったのか、そのISに触った。
触ってしまった。

触ったISがいきなり輝きだした。
まるで僕に何かを伝えようとして。

（な、なんですか。このISは一体僕に何を！？）

僕は手間取ってそこから動けなくなった。
まるで眼が熱くなるように感じた。

「くら！！君は一体何をしている！！」

その時、大きな声が僕を呼んだ。

それからの僕の記憶は無い。

何をされたのかは僕は知らないが、なぜがその時から僕は転校することになった。

この時から僕の運命が変わった。

IS。

正式名称は「インフェニット・ストラトス」。

宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツ。開発当初は注目されなかったが、篠ノ之束が引き起こした「白騎士事件」によって従来の兵器を凌駕する圧倒的な性能が世界中に知れ渡ることとなり、宇宙進出よりも飛行パワード・スーツとして軍事転用が始まり、各国の抑止力の要がISに移っていった。

今は宇宙進出は止まっており、今はスポーツとなって注目されている。

ただ、このISは女しか使えない。

だが、日本にある、アラスカ条約に基づいて日本に設置された、IS操縦者育成用の特殊国立高等学校、IS学園の校門の前にある男が一人いた。

IS学園の学生寮の食堂でここにももう一人の男がいた。
男の名前は織斑おりむらいちか一夏が朝ごはんを食べていた。

もちろん食べているのは一人ではない。

一夏がいる席の周りにも5人の女子がいる。
だが、ただいま何かしら討論中である。

「お前。なぜ邪魔をする！！」

長い黒髪でポニーテールの髪型をしている少女、しののさほつき 條ノ之箒が声を荒げながら言った。

「あなたこそ、この件はわたくしに任せておけばいいのですわ」

縦ロールのある長い金髪に透き通った碧眼を持つ少女、イギリス代表候補生のセシリア・オルコットは席に座りながらも優雅に言い放っていた。

「セシリア。それはこっちのせりふよ。あんたたちはおとなしくしとけばいいのよ」

ツインテールの髪に小柄な体格という可愛らしい見た目の少女のファン・リン・鈴音だが、結構サバサバした性格の少女である。
愛称は鈴。

中国の代表候補生でもある。

「ば、僕も話に入れてほしいな」

中性的な顔立ちで、金髪を首の後ろで束ねており、スマートな体型をしている少女、シャルロット・デュノアはあせりながらみんなの話の話題についていつている。

フランスの代表候補生。

一夏はシャルと呼んでいる。

「お前たちに私の嫁は渡さない!!」

長い銀髪で左目の方には黒い眼帯をしている少女、ラウラ・ボーデ
ヴィツヒは食事だというのに腕組をしながら言った。
彼女はドイツの代表候補生である。

「お前ら、さつきから何の話をしているんだ？」

一夏はさつきから彼女たちがなんの話をしているのかまったくわかっていなかった。

だが、この質問をしても「そっちには関係ない」と言われてしまう。

一夏はただ首を傾げるしかなかった。

だが、一夏はまったくわかっていなかったが、実は二週間後に行われるダッグマッチ戦のダレが一夏とタッグを組むか言い争いをしていたのだ。

一夏はタッグマッチ戦のことは知っていたが、この言い争いの意味はわかっていなかった。

この5人の言い争いはHRが始まるまで続いたそうなの。
ちなみに鈴はクラスが違うので担任に頭をたたかれた。

1年1組。

これが一夏たちのクラスである。

鈴はちなみに2組である。

「はい。では皆さん話を聞いてください」

1組の山田真耶やまだまやが一番前の黒板の前に立った。
ちなみに前の隅にはこのクラスの担任であり、一夏の実の姉である
織斑千冬おりむらちふゆが腕組をしながら立っている。

「えゝ実はこのクラスに転校生が着ました」

『えゝ！！』

クラスに大きな声が舞い上がる。

このクラスにいるシャルとラウラは元は転校生なのだ。

こんなにこのクラスに転校生が集まのか。

さらにはこの学園の転入や転校生は珍しいものなのだ。

「で、では入ってきてください」

麻耶に言われて、クラスの前のドアから一人の生徒が入ってきた。

しかし、少しおかしいところがある。

それはその転校生が男子だからだ。

身長は170あるか無いかの大きさで、髪は赤色で左前髪は少し分
かれており、頭上の髪は少しもボサボサしていなく、彼の真面目さ
が伝わってくる。

さらには誰もかがわかるほどの赤眼なのだ。

「で、ではご挨拶を」

麻耶に言われて少年はうなずいた。

「相田翔あいだしょうといいます。これからよろしくお願いします」

翔は軽くお辞儀をしてきた。

そのとき、いきなり女子たちが騒ぎ始めた。
まあ、一夏以外全員女子なわけだが。

「また男子よ。男子!!」

「次は赤髪の日本男子!!」

「顔かわいい。女の子みたい!!」

女子たちそんなのこと一斉に言ってきた。

「おい!!お前ら静かにしろ!!」

その刹那。

さっきまで隅っこで腕組をしながら立っていた千冬が一喝を入れた。
きた。

その言葉とともに一斉に女子たちは騒ぐのをやめた。

「相田。お前は後ろの席だ。前と同じ、男子の世話は織斑。お前がしろ」

「だ、だが千冬姉」

何かを伝えようとして立った一夏だが、いきなり出席簿で頭を叩かれた。

「織斑先生と言えと何回言ったらわかる!!」

「は、はい。織斑先生」

一夏は頭を抱えながら誤った。

「わかればいい」といって千冬は腰に手を当てた。

「相田はちゃんとした検査の結果、ちゃんとした男子だ」
「そ、そうですか」

以前シャルの男装件があつたのでIS学園ではちゃんとした性別の検査をすることになった。

翔はさっきまでのやり取りを無言で見ていた。

1 - 1 プロローグ（後書き）

今回、誰もかが考えているだろうと思われるダブル主人公としての物語を始めました。

どちらの主人公も応援してくれるとうれしいです。

感想、お待ちしております。

では、以上k u x uでした。

1 - 2 操作

翔は千冬に言われて一番後ろの席に座った。

席に着くまで何人かの生徒の眼が光っていたのはわかったが、気にしないことにした。

「それでは、生徒も増えたことですし、早速授業を始めましょう」

麻耶が気を取り直して授業を始めた。

はじめは普通の授業だったのだが、数分してから問題は起こった。

（まったくわかりません）

翔は心の中でそうつぶやいた。

もうすでに汗が出てきている感覚がする。

実は翔の転校は急な話なのだ。

そんな翔にもものすごく分厚い本を読めるはずがない。

実際、決まったのは3日前のことだ。

「はあ」

翔はため息をついた。

だが、そのため息は見られてはいけない人に見られてしまった。

「どうかしたのですか？相田君」

麻耶が心配そうに、だが眼の奥はものすごく輝きながら聞いてきた。

「え？い、いや。その〜」

麻耶が声をかけた瞬間、クラスの全ての生徒が翔のほうを振り向いてしまった。

さらに翔の汗がさらに流れていく。

「そ、その〜ほとんど内容がわからないのですが」

翔は何かを決心して麻耶に伝えた。

麻耶と周りの生徒はまた驚いていた。

「あの〜転校前に渡された冊子が会ったはずですが」
「読み終われませんでした」

翔は実は読み終わるどころかまったく読んでいなかった。
ほかの引越しや、この学園にいくための手続き。
そのおかげでまる3日間が終わってしまった。

「相田の場合はしょうがない。だが相田」

「は、はい」

「次の授業は実際にISを動かすものだが」
「……」

千冬の言葉に翔は無言になってうなずいた。
ちなみにこの会話のとき、周りの生徒はヒソヒソと話をしていた。
内容はなんかわかる気がする。

そしてこの時間は翔にとってなにもわからないまま授業が終わった。

落ち込んでいるとき、一夏が翔の席に来て話しかけてきた。

「おい。男子は急いで着替えに行かないと」

「え、あ、はい」

一夏に言われて翔は立ち上がった。
そして急いで教室を出た。

「とりあえず、自己紹介だけな。俺は織斑一夏だ。一夏でいい」
「相田翔です。こちらこそ。翔でいいです」

お互い自己紹介をして着替えるために第3アリーナに向かって走る。
どうやら翔は校内の道は覚えているらしい。

そして第3アリーナについた2人は早速ISスーツに着替え始めた。
翔の着替えを見て一夏は話しかけた。

「お前、意外と細いな。なんか、その、ちゃんと食べているか？」
「え？ええ。食べていますが、僕はどうやら筋肉が付きにくい体質らしいので」
「そうなのか」

一夏は翔の体を見た。
確かに細い代わりにまるで筋肉がほとんど無いように見える。
しかも肌は見たただけで女性見たいに見える。

「お前、本当に男だよな」
「はい。そうです」

一夏の問いに翔はなにかわからない顔で即答した。

「そ、そうか」

「それよりも、早く着替えなくっていいのですか？」

そんな会話をしている間に翔はもうすでに着替えを済ませている。翔のISスーツは赤と黒が混ざっている色で二の腕まで袖が伸びていて腹の部分は完全に隠れている。

「あ、マジかよ!!」

翔の言葉に一夏は驚いた。急いで着替えを再開した。急がないとあの地獄のお説教がまっている。

翔が声をかけるタイミングがよかったのかギリギリ時間は間に合った。

だが結局一夏は千冬の出席簿アタックを食らった。理由は遅いの一言だった。

「では、皆さん。今日もISの空中コントロールの実習です」

『はい!!』

みんな元気良く返事をした。だが、翔だけテンションが低かった。

「では、それぞれ専用機持ちを中心にしてそれぞれ操作しろ」

千冬の言葉の後、みんな言われたとおりに集まった。
翔は一夏の元に来た。

「では、まずは順番ずつ操作しようか」

一夏の言葉にみんなうなずいた。
こうして次々にISの操作をした。

「どうだ一夏。調子は」

そのとき、一夏の幼馴染でもり、専用機持ちでもある篤が話しかけてきた。

「おう篤。まあまあだな」

「そうか」

「じゃあ次は翔だな」

こんなタイミングに篤が来たのはそれは翔の観察である。
実は専用機持ちの5人は実は翔が女であるかも知れないとの疑いがあるのだ。

こうしていま篤が監視としてこつちに来たのだ。
もちろん、自分がやるべきことは忘れてはいない。

「じゃあ、乗ってくれ」

一夏が言われて翔はISに乗った。
翔が乗っているのは日本の専用機の打鉄だ。
だが、乗ったのはいいがまったくISはビクともしない。

「おい、どうした？」

一夏が心配して声をかけた。

「あの～。どうやって空中に浮かすのですか？」

翔の言葉に全員こけてしまった。

「お前、ちゃんと動かしたことはあるのか？」

「じ、地面を歩いたことがあるだけです」

翔はあせって告げた。

どうやら翔はISの動かし方をまったく知らないようだ。

「イメージするんだ。空中に浮くみたいなイメージを」

「イメージですか」

翔はそういわれて目を閉じた。

そのとき、打鉄がいきなり浮き出した。

「うわ!!」

だが、動いたのはいいがコントロールがうまくできていないようだ。
しばらく空中にいと落ち着いたみたいだ。

「よかったです」

翔は安心の息を吐いた。
そして空の景色をゆっくり眺めた。

「これが、空から見た景色ですか」

なんなだ心地よい気持ちにした翔だった。

1 - 3 秘密の女会議

翔はいったん地面に戻ってISから降りた。
だが、戻ったとき、みんな驚いた顔をしていた。

「あれ？どうかしたのですか？」

翔は麻耶に聞いた。

「あ、あの相田君。今のは？」

「な、なんですか？」

いきなり強く迫ってきて逆に翔が驚いてしまった。

「すごいですよ。打鉄であんなスピードを出すなんて」

麻耶は目を輝かせながら言った。だが、翔はまったく意味わかっていなかった。

そして、翔は麻耶の輝いた眼を回避した後、千冬に話を聞いた。

「あのー僕はいつたい？」

「相田はどうやら自覚はしていないようだな。実はさっきの打鉄の飛行スピードがいままでに無い最高スピードだったのだ」

「さ、最高スピード」

出した本人も話を聞いてさらに驚いた。
これでみんなが驚いた理由もわかった。

「すごいな翔」

一夏が微笑みながら翔に言ってきた。

「これぐらいの速さが出せるなら専用機はどうなるんだ？」

「相田に専用機など無い」

一夏の言葉に千冬が訂正した。

その言葉にさらに全員驚いていた。

「お、俺みたいに翔も専用機もらうんじゃないのか？」

そのとき、また一夏に出席簿アタックが炸裂した。

「敬語を使え。しかも、相田が専用機がないのは織斑。お前のせいだと言ってもいいのだぞ」

「お、俺のせい」

「更織ちうしきと同じ理由だ」

一夏はそのことを思い出した。

以前、更織簪ちうしきかんざしの例があった。

彼女は日本の代表候補生である。

だが、一夏の専用機、【白式】びやくしきの開発で日本の開発者のほとんどがそっちに力を入れてしまって変わりに簪の専用機の開発ができなくなったのだ。

翔の専用機も同じ、いや、それ以上のことなのだ。

その理由は翔の本人にある。

翔のISの適正はCである。

しかも、今の行動。

とても専用機を扱える素質ではない。

一夏の場合は千冬の以前の専用機、【白騎士】のコアがあったが、今回は翔に使うコアもないのだ。

「そういうことだ。とても相田の専用機を用意できる状態ではないのだ」

「はあ」

翔はなにもへこんではいない様子で返事をした。
まるでそのことをあらかじめ知っていたみたいに。

この日の授業はすべて終わり、翔は一夏と同じ部屋にいた。

2人ともすでに私服に着替えている。

もう夕飯は食べ終わっている。

2人は静かにお茶をすすった。

「お、翔。お前お茶入れるの上手だな」

「ありがとうございます」

一夏に言われて翔はお礼を言った。

だが、一夏はひとつ思ったことはあった。

あれから翔とはいろんなところを案内してたくさんお礼を言われた。
だが、翔は決して笑顔を向けなかった。

（なんか、今回の転校生も結構癖があるやつかもな）

同じ時間、箒、セリシア、鈴、シャルロット、ラウラたちはみなシャルロットとラウラの部屋に集まっていた。
この集まりは、翔のことに関係している。

「で、どうだった？」

「なぜになにもしていないあなたが仕切るのですか？」

「私は違うクラスだからしょうがないでしょ」

「まあまあ2人とも」

ただの会話のはずだったのに口喧嘩に発展しそうになりかけたとき、シャルロットが止めに入った。

「しかし、実習の時もそうだったが別に怪しいところは少なかったぞ」

箒が本題を話すために口を開いた。
隣でラウラもうなずく。

「しかし、顔は女みたいだったよね」

「だが、一夏に聞いたところ、着替えは一緒に着替えていたらしいぞ。普通に会話もできているらしい」

ラウラが思い出しながら言った。

だが、鈴はその言葉に少し疑問に思った。

「あんだ。よく聞けたわね」

「うん？なんか悪いのか」

「一夏さんの性格が違ったら感気づかれていたかもいませんでしたのに」

ラウラの行動にセルシアはため息を吐きながらつぶやいた。

「だけど、本当に僕みたいに女の子なのかな？」

シャルロットが改めて言った。

そう。この作戦会議は翔は実はまた女性ではないかのことだった。シャルロットの件のことでこの4人はさらに怪しんでいる。

「あんたが言うと言得力がないわね。完全に男子になりきっていたくせに」

「そ、そんなあゝ」

鈴の一言でシャルロットはシュンとする。だが、4人は気にしないで会話を続ける。

「とにかく、わが嫁をまもるために何とか事件が起こる前に何とかしないとね」

「あんたの嫁じゃないけどね。それには同感だわ」

ラウラの言葉に少し不服だが鈴は同感したみたいだ。

「私もこれ以上は被害を出したくないですわ」

「ほう。その言葉にはいろんな意味が含まれているみたいに見えるぞ」

セルシアの言葉に算がにらみながら言う。

「僕は、いったいどうしたらいいのだろ」

一人、シャルロットだけ違うことを気にしていた。男であってほしいのか、女であってほしいのかわからなかった。

「とにかく、一番高率な方法を考えるしかないな」

「しかし、着替えが一緒にできている状況でさらに性別が確かめられる方法はあるのか？」

箒にそういわれてみんなうで組しながら考え始めた。

だが、もうすでに答えは出ていたはずだがその方法は一切使いたくなかった。

「やはり、お風呂ですかね」

セルシアが意を決して口を開いた。

みんなその言葉に耳を傾ける。

「少々危険ですがそれしかないですよ」

「……危険」……

みんなセルシアの危険という言葉のみに反応した。

それはみんなが口にしたくなかったことと一致している。

それはもし翔が女だった場合だ。

「どどど、どうしよう」

頭が沸騰しそうなシャルロットが枕を抱きながら言った。
「いったい何を想像したのか。」

「だが、これが一番効率がいいだろう」

「そうだな、もし一夏が手を出したとき」

「私たちが殺せばいいのだから」

全員いっせいに顔が暗くなった。
だが、いまだにシャルロットのみが顔を赤くしていた。

1 - 4 朝と学習

次の日。

翔と一夏は朝食をとるために食堂に来ている。

とりあえず2人は焼き魚の定食を頼んだ。

2人が朝食を食べているとき、箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラが近くの席に来た。

「お、おはよう」

「……おはようございます」

一夏が挨拶した後、翔も静かに挨拶をした。その声はまるで昨日の同一人物は思えない。転向してきたときと同じテンションだ。

「うむ。おはよう」

「おはようございます。一夏さん。相田さん」

「朝から仲がいいようね」

それぞれ朝食を持ちながら席に着いた。

「なんだよ鈴。仲がよくって悪いのか？」

「べ、別にそんなんじゃ」

「ゆっくり眠れた？一夏？」

鈴がしゃべっているとき、シャルロットが会話に入ってきた。もちろん、鈴は不愉快な顔をしている。

「一夏。朝食の時は私を誘えといっているだろ」

ラウラが腕組しながら言ってくる。

「そういわれても、翔のことがあるからな」

「こいつはまだほかの生徒と話していないじゃないか？」

ラウラは翔を見ながらいう。

鋭いラウラの目線を浴びても、翔はおくすることなく朝食を食べ続ける。

何回かこちらを見たがまだ食べ続ける。

それは何も思っていないかのように。

「こいつ。いい度胸してはいるな」

「なんで喧嘩腰なんだよ」

一夏があきれながらツツコム。

「しかし、ほかの生徒とは本当に話さないな。何でだ？」

「その、まだこの学園にきて手間取っているみたいな感じで」

一夏が聞いたら翔はそう答える。

「そうなのか」

「一夏はそんなことはなかったな。普通に女子と話していたぞ」

篤はいやみを言うようにいう。

「なんでそんなにいやな風に言うんだよ。しかも普通じゃねえよ。緊張していたよ」

一夏は訂正しながら言う。

だが、箒の言葉を聴いてほかの4人は一夏をにらんだ。

「だから違うつて」

にらんでくる4人プラス1に対してさらに訂正する。

「一夏。僕もう食べ終わりましたけど」

「え！？マジで！？」

さつきからこの6人が会話をしているとき翔はパクパク朝食を食べていた。

もちろん一夏は食事はほとんど進んでいない。

そんな翔を見て一夏は一気に食事を流し込む。

「いや、そんなに急がなくても大丈夫ですよ。僕はお茶でも飲んでいますし」

「お、おお。そうか。！！」

そんな時、一夏が一気に顔が真っ青になった。

これはもしかしくつてもものに魚の骨が刺さったらしい。

「あ、一夏。お茶です」

「す、すまねえ」

一夏は翔に差し出されたお茶をのんだ。

「ハア。ありがとな翔」

「いいえ。ビックリしました。さつきも言いましたが食事はゆっくりとってください」

「お、おお」

翔にそう言われて一夏は改めて食事を食べる。
その光景を見ていた5人はお互い見合った。
完全に目で会話していた。

今日の時間は普通授業の時間だ。
翔は日本人ということなので普通に日本のクラスで勉強していた。
今は数学の時間だ。

「では、この問題を相田。解いてみる」
「は、はい」

千冬に言われて相田は席を立つ。
問題は結構難しいものである。
みんな頭を抱えている。

「です」

だが、その問題をすぐに翔は解いてしまった。
周りのみんなは驚いていた。

「……。では相田。これも解いてみる」

千冬はそういいながら即興に問題を作った。
だが、その問題も表情一つ変えずにあっさり答えた。

その後、普通に授業は終わった。

「すごいね。相田君。あの問題結構難しかったのに」

「あ、ありがとうございます」

「お前、頭いいんだな」

女子生徒の言葉を返した後、一夏が翔の席に来て言ってきた。

「じゃあ、これも解いてみてよ」

翔の席に布仏本音のほとけほんねが言ってきた。

一夏はのほほんさんと呼んでいるらしい。

「6 1 6 1 8 2 6 1 9 7 × 7 5 4 4 1 5 7 1 4 5 は？」

「4 6 4 8 5 7 8 5 1 3 0 3 4 5 7 2 7 5 6 5 です」

……………。

一瞬。一瞬だった。

翔の口からはなぞの呪文みたいな数字を言ってきた。

「え、え」と

「お前、答えわかっていないだろ」

「そ、そんなことないよ。じゃあ次は7 8 7 7 8 × 9 4 5 8 5 は？」

再び本音は問題を出してきた。

しかも結構難易度を下げてきた。

「7 4 5 1 2 1 7 1 3 2 です」

「あ、そくだよー!!」

「違います。正確には7 4 5 1 2 1 7 1 3 0 です」

「へ？」

「やつはおまえ答えわかっていなかっただろ」

本音の反応に一夏がツツコム。

翔は軽いため息は吐いた。

「も」。アイツチの意地悪」

「なんですかその呼び方は？」

本音にそう呼ばれて翔は聞く。

本音はそれを聞かれて得意げな顔になる。

「ん？相田君に私がつけたあだ名だよ」

「被害者がまた一人か」

「被害者ってどういうこと？おりむ」

本音は一夏の腕に突つつく。

まるで子供だ。

「そういえば、相田君はタッグマッチのとき、誰とペア組むの？」

そのとき、たかつきしずね鷹月静寂が翔の席に来て聞いてきた。

「そういえば、僕はいまだにISの操縦があやふやなんですが」

翔もそのことをわかっていない。

タッグマッチのことはもう知らされているので知っている。

ちなみに、教室のドアの小さな隙間から5人の少女たちがその光景を見ていた。

てか、箒は別に隠れていなくてもいいと思うのだが。

1 - 4 朝と学習（後書き）

後書き暴露コーナー。

翔「な、なんですか？このコーナーは？」

作者「後書きのコーナーです。僕とこの小説のキャラと一緒にこの小説の話をするコーナーです」

翔「と、言うことは暴露もありということですか？」

作者「ええ。ほかの小説がぎりぎりなのにこの小説をあげているかですよ」

翔「すでに暴露しましたね」

2人「……」

2人（ボケがないと話が進まない！！）

早くもダンマリですみません。

1 - 5 疑問と風呂場の少女たちの作戦

昼休み。

みんな集まって昼食を食べていた。

翔はお昼に似合っているパンで一夏はラーメンを食べている。だが、なかなか2人の食事は進まなかった。

理由は簡単だ。

隣の机の例の女子5人にものすごく見られているからだ。

（お、俺。なんか怒らせることしたか？）

（な、なんでこちらを睨んでいるのでしょうか）

そんなことを考えていたせいで食事が終わるのに時間がギリギリになってしまった。

教室に戻るときもわかりやすい尾行でついてきている。

「あのな、お前らさつきからなんだんだ？」

我慢ができなくなった一夏は後ろを向いて聞く。後ろの人影はわかりやすくビクンとなっていた。

「な、なんでもないわよ」

「そ、そうだ。なんでもない」

「そうですわ。同じクラスなんですし」

「決して尾行していたわけじゃないからね」

.....。

シャルロットの一言により全員黙りだした。

完全にいまのシャルロットの一言は尾行していましたがと言っている
みたいなものだ。

「あれ？ボーデヴィツヒさんは？」

翔はまるで最初からラウラも一緒に尾行していたのをわかっている
ように言った。

「あれ？あいつどこに言ったのよ」

本当にさっきまでラウラもそこにいたそうだ。
たぶん、本気で一夏を尾行していたのだろう。
見つかったときの隠れたかもさすがに知っているようだ。

「しかし、よくラウラもいたことを知っていたな。まあ、予想はで
きるけどな」

「まあ、それもそうですが、見えていましたから」
「見えていた」

一夏は思った。

確かにさっきまで見つかった4人はちらちら見えていたが、ラウラ
の姿は本当に見えていなかった。

それなのに、翔は一夏よりも後ろを見ていないのにラウラの姿を見
えていたといっている。

「あ、そろそろ時間です。急ぎましょう」

「お、おう」

そういつて全員急いで教室に向かった。

今日の最後の授業はISの実習だ。

いつもと変わらず、一人一人ISに乗っていく。

翔は相変わらずISの操作がうまくできていない。

「相田君とISの適正は結構低いですが、こんなに操る人が苦手な人はそうそういませんでしたね」

「す、すみません」

麻耶に言われて翔は少ししょんぼりする。

相変わらず、翔は操るとき、早いのはいいがその分さらに操作がうまくできていないのだ。

「相田さんの場合、集中力が足りないのですか？」

そのとき、セシリアが話しかけてきた。

「それだったらこの銃を使って見せてよ」

近くにいたシャルロットがそういいながらハンドガンを渡した。翔は渡されたハンドガンを構えた。

「じゃあ、ここのターゲットに狙って見せてよ」

そういったと、翔の前にターゲットが出てきた。

しかし、いま翔が乗っている機体は打鉄だ。

銃を使う装備はまったくない。

つまり、一夏と同じ方法でこの銃を使うしかない。

「では、いきます」

翔はそういつてハンドガンの引き金を引いた。
バンッと翔が持っていた銃先から大きな音が出た。

「ど、どうですか？」

「こ、これは」

翔が撃った弾は見事にターゲットの真ん中に当たっていた。

「これは集中力はあるようだね」

「そ、そのようですね」

「だったら考えられる可能性はひとつだけだ」

「あ、織斑先生」

千冬がそっぴいながらこっちに來た。

どうやら千冬には翔がなかなかうまくISが操作できない理由がわかったようだ。

「もしかしたらお前がそのISの適正が合っていないようだな」

「て、適正ですか」

「それってどういうことだ？」

一夏が千冬に聞いた。

千冬はうなずきながら言う。

「ISのコアは本当にブラックボックスだ。それを考えればその可能性がものすごく強い。しかもISが操縦できるのに今までそんなことが起こることは初めてだ。つまり、新たな可能性が生まれる」

千冬の言葉にみんな静かに聴いていた。

この日は特別に男子は大浴場を使うことが可能の日になった。
もちろん、こうなったのは幕たちの仕業だ。
ここから彼女たちの作戦が始まる。

「しかし、千冬姉の話を聞いていると、お前がISをつまく操るには時間がかかりそうだな」
「気が重いです」

2人は着替えのあと、普通に風呂場に来た。
相変わらず、この風呂場は広い。

しばらくお互い体やら洗った。
そのあと、同時に湯船につかる。

一夏はあの時、シャルロットと一緒に風呂に入っただけのことを思い出して赤面する。
その顔があるカメラが見届けていた。

「あんた。何したのよ」
「な、何で僕に来るの？」

その監視カメラの映像を見ている少女5人は一気にシャルロットを睨む。

「しかし、今の様子だと別に女の部分は見せていないな」

さつきから普通に見ていたが確かにおかしいところはない。
てか、この5人は完全なる覗きだということには気づいていないの
か。

「しかし、相田がさつきからこっちを見ているぞ」

そう。実はさつきから翔の視線がこっちのカメラを見つめていたの
だ。

ちなみにこのカメラは天井の隠しカメラだ。

「ん？どうした翔」

「あ、いえ。何でも」

翔はそう言ったが明らかに気にしていた。

「……」

結局、少女たちが思ったことはなにも起こらなかった。
だが、代わりの事件が起きた。

「さて、そろそろ上がるか」

そう言つて一夏は立ち上がったとき、カメラ映像を見ていた少女た
ちは顔を一気に赤くした。

理由は、言つまでもなかった。

箒、セシリア、鈴がシャルロットとラウラの部屋から出たとき、そ
の場に翔がいた。

「こんにちは皆さん」

翔は無表情で挨拶した。

「あんた。何よ」

「何って。そうですね」

「用が無いならわたくしたちは自分たちの部屋に戻りますわ」

そう言つて3人は自分の部屋に向かつてあるく。

「まあ、一夏にはあの監視カメラは気づいていなかったようですが」

その言葉に3人どころか、さっきまでドアを開けてみていたシャルロットとラウラもビクツと体が動いた。

「まあ、ほどほどにしてくださいね。あれも立派な覗きなので」

そう言つて翔は自分の部屋に向かつて歩いた。

「な、なんでバレた？」

「あの人。本当に只者ではありませんわね」

不思議な空気が少女たちを包みこんだ。

1・5 疑問と風呂場の少女たちの作戦（後書き）

後書き暴露コーナ

一夏「今日は俺が担当だな」

作者「とは言っても暴露ごとなんてほとんど起きませんが」

一夏「それじゃあただのトークコーナじゃねえかよ」

作者「まあ、そのことは百も承知でしたよ」

一夏「大丈夫なのか？この作者。来週からヒロインたちが来るのに」

作者「それって」

一夏「命が、あるといいな」

作者「！？」

1 - 6 一夏の用

翔が転向してから4日経った日曜日。
珍しく翔は一人で校内を歩いていた。

しかし、彼の行動に変わったことはない。

大抵は一夏が一緒にいるので下手なこととはできないのか。
まだ翔を怪しんでいる筈、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラは
尾行していた。

「あんた。その格好はなに？」

ラウラに向かって鈴が問う。

「何って、外での尾行やお忍びの時はこの格好が常識だと聞いたぞ」

そうラウラはどこから出てくるかわからない言葉を自身満々に言った。

だが、格好は今の場所では怪しすぎる。

その格好とは完全に迷彩なのだ。

上から下までまるで軍人がきるような迷彩服だ。

まあ、確かにラウラは軍人だが、ドイツなのでその格好は変だ。

しかも場所は校内なのでますます怪しい。

「だからやめようっていったじゃんラウラ」

「だが、意外とこの服は動きやすい」

「あんたね」

ラウラの言葉に全員あきれる。

「いいから脱いでください。見つかりますよ」

「ここですか？」

「部屋でお願いします!!」

「うるさいぞセシリア!!」

「いや、箒の声も十分大きいよ」

こんなことを言い合っているのですぐに翔を見失ってしまった。
箒たちはばらばらに探し出した。
ちなみにラウラは自分の部屋に戻った。

一夏

翔がどこかに行ったので俺は一人校内を歩いていた。
そういえば今日は朝食以来箒たちを見てはいない。

まあ、あいつらだって代表候補生だから忙しいのは珍しくはない。

「あ、一夏!!」

そのとき、俺はあるツインテールの少女に呼び止められた。
だが、今の俺には行きたい場所がある。
しかし、そのツインテールの少女は俺を逃がさないようにこっちに
向かってダッシュしてきた。

「あんた。私が呼んでいるのだから止まりなさいよ」

そいつって鈴は俺の背中を蹴る。

「いてーな!!なにすんだよ」

「何ってさっき言ったとおりよバカ」

「知らねえよ。俺だって行きたい場所はある」

「いいから話聞きなさい」

おう、いきなり縛りですか鈴さん。
こいつは俺のセカンド幼馴染の鈴だ。

髪型を見てのとおり活発すぎるほど活発だ。

あと、貧（ry。

「なんか今変なこと考えていたでしょ」

「な、なんでもないぞ」

そうそう。この言葉は禁句だった。

どうやら俺は思ったことは最近みんなにも伝わっているような気がする。

「いいから、少し付き合いなさいよ」

「何でそうなる」

どうやら本気で拒否権はないらしい。

だが、俺はいま本気で行きたい場所がある。

「いいから。いいから」

なにがいいのかわからないが、鈴は俺の右腕にいきなり飛びついてきた。

こうされると動きづらくって仕方がないのでやめてほしい。

「動きづらいと思ってないでしょうね」

大当たりの温泉旅行だ。

まあ、俺はそんなのは出す気はないが。

本気で当てられるとマジで怖い。

「早く行きましょ」

バン！！

鈴が俺の腕を引きずりながら歩き出したとき、いきなり箒が現れて竹刀で俺たちを叩こうとしてきた。それを見た鈴が真剣白刃取りでとる。てか、2人ともすげえ。

「なに邪魔しようとしてんのよ箒！！」

「なに、お前ならわかるだろ」

そう言つて2人とも一步後ろに下がる。

なんだ、いきなりこの展開は。

しかし、俺は今すぐに行きたい場所があるので巻き込まれたくはないのでさっさと離れる。

「あんたはここにいなさい！！」

「お前はここにいろ！！」

いきなりハモリながら俺を声で止めてくる2人。

なんでこのときはコンビネーションがいいのか本気でわからない。

「私だつて一夏に用がある」

「あんたね。あきらめなさい。もう私が予約したんだから」

俺は何かの商品ですか？

てか、どっち道、予約は受け付けてはいません！！

まじて早く俺を解放してくれ。

「あ、あなたたち。ここで何しているのですか？」

ここで最悪のシーンで来たらだめなやつが現れた。

このせいで俺はますます解放してくれそうにもない。
理由？

勘だ。今までの出来事で、この勘だけなら働く。
なんか言っているこっちもむなし。

「あなたたち。なに探さないで遊んでいるのですか？」

そう言っでセシリアがこっちに来る。

うわゝ予想ここでもう当たるのがわかる。

「こいつが一夏と一緒にどこか行こうとしていたんだ。セシリアも
なにか言っでやれ」

「あんたも奪い取ろうとしたでしょ」

はて、俺はいつ鈴の所有物になったのだろうか。記憶にない。
しかし、そんなことでさらに会話はエスカレート。

だが、これはチャンスでもある。

このまま俺はスルツとこの場から離れて目的の場所に行こう。

「あ、待て一夏！！」

「待ちなさいバカ！！」

「お待ちになってください。話はまだ終わっていませんよ」

そう言ってくる3人だが、俺は無視して逃げる。

「あ、一夏、何しているの」

おう、違う道からシャルが現れてきた。

ちなみに俺がシャルと呼んでいるのは親しみやすいからだ。

だが、今はそんなことは関係ない。

普段落ち着いているシャルでも後方の3人を見れば同じ風になるだろう。

怒ったらある意味シャルが一番怖い。

「あ、一夏。待ってよ」

な、なぜだ。

なぜあの3人にも会っていないのに追いかけてくる。

「あ、一夏！！」

前方からラウラ少佐発見。

て、なぜに校内で迷彩服を着る。

何かの趣味なのか？

「おい、なぜに逃げる！！」

「追いかけているからだ！！」

俺がそういうとラウラは後ろを向いて4人の姿を確認する。
てか、シャルはいつの間に合流している！！

完全に今の俺はいのししに追いかけている感じである。
だが、俺の目的地に行けばあの5人は入ってこれない。

「ちょっと待ちなさい一夏！！」

「まて一夏!!」

「お待ちになつてください」

「一夏。まってよ」

「ふむ。意味がよくわからんぞ」

じゃあ追いかけてくるな!!

俺はそう思いながら目的地について駆け込む。
思ったとおり、5人は追いかけてこない。

それもそのはず、ここは男子トイレだからだ。

俺は自分の部屋から出た瞬間、鈴に話しかけられたからな。

もちろん5人は入ってこれない。

ん? 待てよ。

俺、出てこれねえ。

1 - 6 一夏の用（後書き）

後書き暴露コーナ。

作者「どうも作者のkuxuです」

第「どうも、ヒロインであるはずの篠ノ乃第だ」

作者「あのゝ第さん。なんか言葉にとげがあるのでか」

第「そう思ってもらってもかまわない。この小説が始まってから私はあの4人と一緒に行動することは多いが一夏と一緒に行動がまったくない!!」

作者「ス、スミマセン。多分、もうちょっと経ったらそうなると思います。多分」

ガチャ
第

作者「なぜに真剣をとりだすのですか？大丈夫ですよ。一夏側のヒロインなのでそのシーンは必ずやります」

第「必ずだな」

作者「は、はい（汗）」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1028x/>

IS～インフィニット・ストラトス～赤竜と白の騎士～reddragonawhiteakni

2011年10月10日00時53分発行